

〈若い保育者から〉

保育者二年生のつぶやき



森 道 子

幼稚園で子どもたちとの生活を始めて、二年間が夢中のうちに過ぎました。社会人となってまだ日も浅いのですが、こと幼児教育に関しては、学生時代の何倍ものことを実際の体験から学んでいるという気がします。幼稚園生活のリズムや園内での子どもたちの姿を知れば知る程、その中で果たす教師の役割りについて分からなくなったり、迷ったりすることが多いのですが、毎朝様々な表情で登園してくる子どもたちの顔を見ると、いつの間にかそんな悩みも忘れて、ただひたすら、子どもたちが一日楽しく遊べるようにと願う気持ちがこみあげてくるのです。

今でこそ「遊びを大切に」とか「まず、子どもの中に入って遊ぶことから……」とか言う言葉があたり前のように口から出るようになりましたが、私が先生として初めてこの幼稚園に来た時には、「子どもたちと大いに遊んでください」と言われて大変不思議に思ったことでした。学生時代にほとんど子どもと触れる機会がなく、卒業論文でも実験の結果のみに目がくらんでいた私でしたから、子どもの生活の意味など考えてみたこともなく、子どもと一緒に遊べば良いのなら私にもできそうだと、子ども好きであることを唯一の心の支えに、この道に入る決心をしたのでした。

子どもたちを楽しく遊ばせるための教師の仕事は実に多く、精一杯の心配りをしたつもりで、環境と準備を整えて登園を待つのですが、いざ保育が始まってみると、こちらで母親との別れを惜しんでいる子があるかと思えば、あちらでけんかの泣き声があがる。「先生、遊ぼう、遊ぼう」とせがむ子がいるので相手にならうと思うと、「先生、ころんじゃったの」と半べそをかいてやって来る子がいるといった具合で、てんてこまいです。子どもなど幼稚園に来ればすぐに遊び始めるものと思っていたのに、突っ立ったまま身動きもしない子もいます。特に年少組では、先生は子どもたちにとり囲まれて自由がありません。ひとつの遊びからそっと抜け出して他を見に行こうとすると、せっかく遊んでいた子どもたちも遊びをやめてぞろぞろとついてきてしまうのです。一か所子どもたちの満足のいくまで一緒に遊んでいられたらどんなに気持ちが良いかと思ひ、つくづく子どもと遊ぶ、また子ども同士を遊ばせる難しさを感じました。

私にとって初めてなら子どもにとっても初めてということが多くて、続出するハプニングにオロオロするばかり。事あるごとに主任の先生のお手を借り、先輩の先生

の真似をして過ごしました。いつまでたっても子どもたちがどこで何をしているのか把握できず、また同じ幼児の行動を見ても、他の先生に比べてどうして私には見えないものが少ないのかしらと情けなくなるのが度々でした。こういう時、保育経験の浅さはもちろんのことですが、人生経験という面からも自分の未熟さを感じさせられました。よく「子どもの気持ちになって」と言いますが、これはとても難しいことです。自分の生きてきた人生は一つですから、いくら自分の幼年時代の思い出から押しはかってみようとしてもはかりきれない所がたくさんあります。同時に、子どもの性格や行動の意味を知ることでも大変難しく、やはり子どもたち一人一人が分かるようになるためには、私自身の人間としてのふくらみ、幅広い人生経験が必要なのだ痛切に感じました。

ただ単に子どもと共にいる大人というだけでなく、保育者である以上は、子どもの発達段階を正確に知った上であらゆる見通しを持って保育していかなければならないはずですが、その判断の基準が大変難しく、結局大方の子の平均値のような所をとりながら、実際の子ども

の気持ちと微妙にずれて心が通じ合わずにいたのではな

いかと思います。

四歳児でも保育者のひざや肩にのるごの好きな子が多いのに最初はびっくりさせられました。ちょっとかがむと、後ろからべったりおぶさってきたり、「ほくね、あさごはんいっばいたべたんだよ」と言ってるやうに来た子を抱き上げて、「まあ、おもうなつたこと！」と感心してみせると、我も我もと寄ってきてとめどがないほどになります。またある時、私が帰るバスの中で偶然園児と一緒にになりました、「ねえ先生、きょう、ようこのここんとところに赤チンつけてくれたんだよねえ」と、突然うれしそうにはなしました。その子はいつもべったり甘える性質の子で、一度私にしがみついたら最後、なかなか離れようとしなくて、私も片付けなどの忙しい時にはなるべくとりつかれないように、などと気をつけたりしていたのですが、ささいなことをこんなに喜んでくれたのだと思うと、他の先生に頼まず、自分で薬をつけて

あげて本当に良かったと思ひ、忘れかけていたものにハッとして気がついたやうな気持ちでした。教師と幼児の間関係はこのようにごく日常的な信頼関係の上に成り立つものなのでしょう。他日同じ子に「どうしてようこちゃんはいつもせんせいにくっついてるの？」とたずねたところ、「だって、せんせい、いいにおいするんだもん」と鼻をすりよせて来ました。なんだか私もほのぼのとうれしくなつたことでした。

「どれだけの子にどれだけ手をかけてあげられたかによつて保育の価値が決まります」と主任の先生がよくおっしゃいます。困っている時に助け、小さなことでもめんどろがらずにすぐしてあげられた時には、お互いにとても穏やかな気持ちでいられます。この子たちがいつの日か本当に一人で工夫してあれこれできるようになるまで、てんでこまいを続けるのだらうと思つています。

(牛込成城幼稚園)